

SRID NEWSLETTR

No. 359 October 2005 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

10月号

最近 ODA について考えたこと

ユニコ インターナショナル株式会社 取締役管理本部長 藤倉 洋一

アフリカの開発と援助

堀内 伸介

グローバルフェスタ 2005 出展

学生部

お知らせ

1. 懇談会 10月14日(金) 18時30分から20時過ぎ
テーマ: 「草の根ラ・プラタ流域再開発研究会 設立と今後の展望」
講師: 三上 隆仁氏
会場: 国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室
2. 11月の幹事会 11月8日(火) 18時30分~20時
会場: 国際協力銀行の予定

最近 ODA について考えたこと

ユニコ インターナショナル株式会社

取締役管理本部長 藤倉 洋一

最近のベストセラー『病気にならない生き方』（サンマーク出版）の著者新谷弘実先生によれば、人間には成長か老化しかないという。国にも同じことが言えるのだろうか？そんなことがあってはなるまい。「発展途上」は人間、国を問わず、至るところにあるような気がする。1990 年前後のニューヨークだって治安の発展途上都市であった。

当時は、「ボトルマン」という商売(?)が流行っていた。マンハッタンのあちこちで、ビニール袋に水の入ったワインボトルを持ってわざと歩行者にぶつかり、ワインボトルを落として割り、お金をせびる輩がいたものだ。それが今では夜でも大手をふって歩けるくらい安全になり、「ボトルマン」は死語になってしまったらしいが、それが 9・11 の結果だということから皮肉な話である。

日本人は、海外にいるとき、折につけて日本のことを考える。海外にいる日本人のほうが日本についてセンシティブになっている。しかし、日本のことをいかに知らないかを知って愕然とする。もう大昔の話になるが、勤めていた銀行でフランス語トレーニーとしてグルノーブル大学で学んだ経験がある。最初試験でクラス分け（外国人だけのクラス）をして、一クラス 15,6 人の上級クラスにたまたま入ったが、同じクラスに日本人女性がいた。最初の授業で自己紹介をしたとき、この女性が「三井」と名乗ったのには驚いた。小生の派遣元も三井（銀行）である。授業後聞いてみたら、父親は「三井ファイナンス・ヨーロッパ」という三井銀行ロンドン現地法人の社長で、銀行の大先輩であることが判ったのだ。

この女性は後に写真家と結婚したと風の便りに聞いたが、2つの思い出がある。一つは、授業で日本の「こけし」を説明したことである。こけしの由来や歴史をフランス語で説明したのだから、意表を突かれた思いだった。こちらは社会人で、日本人女性は学生である。それにつけても、自分は日本の文化や社会を理解しておらず、皆に説明すらできないのではないかと自分の不勉強を恥じたものだ。もう一つは、彼女がせっせと両親に手紙を書いている話になって、「日本語で書いているが、毎回真っ赤に添削されてもどってくる」と恥ずかしそうに語っていたことだ。英語、フランス語はぺらぺらなのだが、海外生活が長いから、日本語での教育を十分に受けていないのだ。

翻って、周りの ODA コンサルタントを眺めると、一人一人が日本を海外に伝えるスペシャリストだと思う。コンサルタントは舞台が与えられ、現場で学び、刺激を授受し、喜怒哀楽を感じているが、逆に日本にいるときは、自分の回りの知己にそれをアピールして

いるだろうかという疑問がわいてきた。「生きる」喜び或いは辛さも含め、自分の体験をうまく伝えているのだろうかという疑問である。

9月14日、国際開発ジャーナル主幹でSRIDのメンバーでもある荒木光弥さんの「出版記念会」が行なわれた。拓殖大学の渡辺利夫学長が発起人代表で、1970年代、80年代に続き90年代の『途上国家援助—歴史の証言』を出版したことを記念するものだ。この会で感じたことが2つある。一つは、荒木さんの大来佐武郎さんを思慕する気持ちの強さであり、これは本の[終わりに]私的点描にも詳しく述べられている。荒木さんの健筆の影には常に大来イズムが存在する。

もう一つは、明石康さんら来賓4、5名が挨拶をしたのだが、ある来賓者がこの出版記念会の参加者を総称して「ODAファミリー」と呼んだことである。確かに会場は、外務省などの官庁、独立行政法人、大学の先生方、NGO・NPO、コンサルタント会社など産学官からの参加者で埋めつくされており、大変な盛況であった。しかし「ODAファミリー」は開発援助の一層の発展に向けて一丸となって結束しているのだろうかというのが、私が従来から持っている疑問である。ODAに取り組んでいるといっても、立場によってずいぶん理解や考えに温度差があるような気がする。

とはいえ、ここでつくづく思うのは、こうした「ODAファミリー」が閉鎖的にならず、内外に向かって大いに働きかけるファミリーであるべきだと思う。荒木主幹や渡辺先生が色々発言されたり、執筆されたりしてODA推進の精神的リーダーとして活躍されているのは真にありがたいことであるが、それをもっと国民のレベルにまで推し広めるのは「ODAファミリー」一人一人の責務ではないだろうか？外務省を始めODA広報にかなり力が入ってきているが、まだまだ十分とはいえない。その意味では、SRIDの活動も発展途上にあるのかもしれない。

我が国のODA援助額は、2000年以降減少する一方であったが、何とか今年で底打ちになりそうだ。しかし、ODAというと、一般にはまだまだ胡散臭い負の面が強く感じられており、現場で汗水を流し開発援助に本当の意味で貢献している日本人の姿が浮かんでこないことが多いようだ。

ODAというと、まだまだ一般の人には身近に感じられないものだ。むしろ、ニュースになる時は悪いイメージが付きまとうケースが多い。何かもっと身近にODAを感じてもらえるいい方法はないだろうか？最近面白くない番組ばかりやっているテレビをもっと有効に使えないものか？「24時間テレビ」ODA版なんてどうだろうか？スポンサーは現れるだろうか？ここで重要なのは、募金額ではなくて、発展途上国がどれだけ援助を必要としているか知らしめ、日本人関係者がどれだけ貢献しているかをつぶさに伝えることであり、それができれば影響力は甚大ではないか。そして、その番組の中で、誇りを持って、日本のODAを演出できれば国民のODAに対する意識も少しは変わるのではないか。十五夜の冴え渡った月を眺めながらそんなことを考えた。

アフリカの開発と援助

堀内 伸介

今年のアフリカへの援助が援助社会では、大きな注目を集めている。G8 首脳会議に先立つ蔵相会議では、IMF と世銀の債務帳消しが決まり、グレンイーグル G8 会議では新たな ODA 目標がコミットされた。G8 では、ブレアー首相のアフリカ委員会報告書、国連の特別首脳会議の MDG レビューでは、ミレニアム・プロジェクトのサックス教授による報告書が討議のベースとなった。

両報告書のみならず、国連専門機関からの報告書、年報、NEPAD 関連の多くの会議、国際的 NGO の会議でも、ODA の大幅な増額による昔懐かしい「BIG Push」が強調されている。適切な政策のもとでの ODA は開発に貢献する、との立場が繰り返されている。サブ・サハラ・アフリカを長年見て来た者として、それほど楽観的にはなれない。サブ・サハラ・アフリカ諸国は殆どが独立以来 40 年を経ている。先進諸国は他の途上地域とは比較にならないほどの多額の援助をサブ・サハラ・アフリカに投入してきた。幾つかの例外があるが、一人当たりの GDP は減少し続け、貧困層は増加し、貧富の格差も大きくなっている。他の地域では見られなくなった感染症が未だ猛威を振るい、5 歳児以下の死亡率など社会指標も悪化している。すべての子供が初等教育さえ満足に受けられず、無知に付け込み HIV/AIDS は多くの人命を奪っている。簡略すぎるが、近代化をダイナミックな経済、開放された民主的な政治、進んだ技術とその利用と規定してみると、多くのサブ・サハラ・アフリカは程遠い距離にある。これが最大の問題であろうかと思う。

「開発」とは何を意味するのであろうか。三百ドルの所得が千ドルになることであらうか。われわれは今、アフリカ人の 50 倍も 100 倍も幸せだろうか。そうは思えない。ナイロビのスラムで HIV 陽性の母親達が手に職をつけて、家族の生活を少しずつでも改善していると確信した時、明日の暮らしが良くなるかと確信した時、子供たちは自分達が亡くなった後も生活していける職があると知った時、驚くほど明るく前向きの生活をする。明日への希望であらう。開発の一面は希望を与えることではなかろうか。

開発とは社会、経済、政治、伝統、文化等々が複雑にかみ合っている社会の内部からの変化の過程ではなかろうか。外部から何が出来るのであろうか。「援助」の名の下で援助国、援助機関が行っていることは何であらうか。開発の戦略、イニシャティブ、貸し付け条件、技術協力、ますます微に入り細を穿った援助は、アフリカのオーナーシップを確保しているのであろうか。アフリカの内部の変化を誘導できるものなのであろうか。

ODA はプロジェクトに始まり、プログラムに進み、さらには部門別財政支援へと形を変えてきている。しかし、このプロセスは開発をプロジェクト、プログラム、部門別の目

標の達成と単純化してはいないか。学校が建ち、婦人の能力向上のセミナーが繰り返され、予算配分の能力が向上され、それら援助の総和が開発であろうか。

欧米の開発や我が国の開発の歴史を振り返ると面白いことに気がついた。欧米の開発では、政府が資金とイニシアティブを使うというよりは、植民地経営も含めて、民間資本が利益を求め、受益者が開発の主役であった。幕藩体制の下では幕府や藩が資金を使うこともあったが、民間資本が田畑の開拓、河川の修理を行ってきた。「新田」といわれるものは、民間の努力、利益追求が主役であった。「援助」をみると直接の受益者でないものが、主役になっている。援助機関も NGO も受益者ではない。援助でアフリカに道路、病院を建設したり、女性の農民を指導したり、グラミー・バンクを創設しても援助国は直接利益を受けない。(国際関係論は抜きとして) 直接受益者が行わない事業とは何であろう。

「適切な政策」とはどのようなものであろうか。世銀の推奨する適切なマクロ経済政策であろうか。80年代、90年代世銀、IMF、援助国が推し進めてきた構造調整政策に代表されるものであろうか。(ちょっと皮肉：アフリカの債務はその20年間に大幅に増加している。)40年間サブ・サハラ・アフリカ諸国は適切な経済政策を実施しなかったというのであろうか。確かに冷戦、内戦・紛争、一次産品価格の長期的低落など内外の条件がサブ・サハラ・アフリカの発展に有利でない事は認める。国民国家としてビジョン、政策立案のシステム、多様な民族文化と利害関係、グローバリゼーションの大波の中で「適切な政策」とはどのようなものであろうか。援助国は前もって答えを知っているのであろうか。

私も老人となり、大分ぼけてきたようである。SRID 会員皆様の教えを請うところである。(shhoriuchi@muc.biglobe.ne.jp)

グローバルフェスタ 2005 出展

学生部

10月1日、2日に、日比谷公園にて「グローバルフェスタ 2005」が催されました。このフェスタは、昨年までは「国際協力フェスティバル」として親しまれていましたが、今年から名称を改め、より国際協力について国民に理解を深めてもらい、身近に感じてもらうという趣旨のもと、今年も盛大に開催されました。

SRID 学生部は一昨年、去年に引き続き、今年もこのイベントに出展いたしました。これまでの出展により、多くの学生や社会人の方々が勉強会やメーリングリストへ参加し、SRID 学生部は着実にネットワークを広げてきました。今年さらなるネットワークの拡大と共に、新たに SRID の一般の方からの認知度の向上を目標に掲げ、このイベントに出

展いたしました。

出展内容としましては、以下の4つを中心に行いました。

① SRID の活動紹介

日頃の活動の中心である勉強会のレジュメや講演会の様子などの紹介を通して、SRID の特色や目的などをブースにきて頂いた方に伝えると共に、後期からの学生部の勉強会やメーリングリスト、本会のシンポジウムへの参加の案内などをいたしました。

② 進路相談会

SRID 学生部の大学院生が中心になり、SRID 内外へのアンケート調査を元に資料を作成し、国際開発に興味があり、将来大学、大学院で学びたいと考えている方々を対象に進路相談会を実施いたしました。

③ スタディーツアー報告書（写真も含む）・新 ODA 大綱に関する構想案の自由閲覧

今までのスタディーツアーの報告書（フィリピン編、カンボジア編、インドネシア編）や、一昨年発表された新 ODA 大綱に関する SRID 本会のパブリックコメントの自由閲覧を行いました。

④ SRID 学生部玉川大学支部による展示

一昨年、去年に引き続いて SRID 本会会員である高千穂先生のゼミ生が、今年も ODA に関する展示を行いました。ODA の現状把握やそれに関する調査を行い、ODA の正確な認知度を上げるためのツアーを提案したものを、模造紙を使って展示していました。

今年のグローバルフェスタのテーマは「ミレニアム開発目標への挑戦」でした。30 度を超える気温に見舞われたにも関わらず、当日は一日目に 3 万 6 千人、二日目には、3 万 9 千人もの方が会場を訪れました。各ブースでは JICA、JBICなどを始めとし、多くの国際機関や各国の大使館、国際協力 NGO のスタッフ、ボランティアの方々が、各々の活動内容や国際協力に対する思いを熱心に語り、またそれらを来場者の方々も真剣に聞いていました。

最後になりましたが、今回の出展の機会を与えてくださり、御協力くださった本会の方々に厚い感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。